

三、^{いつくしまへんさいてんしゃ}巖島弁才天社 桃川 下平



境内全景

◎祭神 市杵島姫命・弁才(財)天《両神は平安期以降、^{しんぶつしゅう}神仏習合

により同一神》

◎例祭 *巳の日まつりⅡ五月の第一「巳の日」

現在では「子どもの日」も併せて祝い、五月三日に行われていて、^{ごこくほうじょう}五穀豊饒、地区の安泰、子どもの健やかな成長を祈願します。(民俗編参照)

*ほかに元日参り、田祈祷、秋季願成就など

◎社殿 *本殿は瓦葺切

妻造

*拝殿は薄鉄板

葺入母屋造



拝殿 (南参道より)

◎由緒 創建年代は不明ですが、かなり古くからの奉祀と伝えられています。祭神の御像(浮彫石像)は慶応三年(二八六七)の造立で、琵琶を奏でるお姿は貴重な石像物です。百年以上の歳月を経て損傷が進み、わずかに青



板碑が安置されていて、「慶応四年戊辰正月吉日」と刻まれています。「お経」と「山神」の組み合わせは昔の神仏混淆の名残でしょうか。

※「巳の日まつり」

境内には明治二十九年銘と同三十三年銘の燈籠が一对ずつ奉納されています。弁才天の化身(神が救済のため、別のものとなって現れるお姿)が「蛇(巳)」ということから、この女神さまの縁日を「巳の日まつり」として、五月の第一巳の日に、この祭りが行われています。下平区の祭りは近郷では珍しく貴重な祭事で、県内では旧佐賀領の養父郡(鳥栖・みやき地方)で多く継承されています。

色の彩色が残っています。

石祠の御扉には美しい花柄文様の彫刻がほどこされていて、造立当時の華やかな神祠が目に見えかぶようです。

ほかに二基の弁才天石祠(かなり損傷)が安置されていて、一基には「元禄十四年(一七〇二)の銘が判読され、数百年にわたる篤い信仰がしのばれます。

神祠の右隣には「南無妙法蓮華経典 山神」銘の石

はの雰囲気をつつそうかもし出しています。

やがて、宮司さんの秒読みが始まりました。「あと五秒、四秒、三秒、二秒、一秒…」秒読みが終ると、威勢のよい太鼓の音が「ドーン、ドーン」とあたり一面に響きわたります。

いよいよ、新年の到来です。悠久の時の流れが、新しい年を刻み、人々の顔がさわやかさを帯び、喜びに満ち溢れています。思わずそこ、ここで「おめでとう、おめでとう」と呼びかう声が一だんとはずんで聞こえてきます。握手をする者、あいさつをかわす者、何時の間にか堂内は人の波であふれています。一歩外に出ると、初詣の人の行列が延々と続き、「今年にかける」地区の人々が目白押しにお参りしており、まさに元旦ならではの風景です。

境内には、テントも張られ、御神酒や心づくしのぜんざいが振舞われています。寒気の中の熱いぜんざいに、人々のぬくもりを感じ、とてもさわやかな気持です。町内では、このような元旦祭が、時や内容を若干変わらせながら、ほとんどの地区で開催されており、どの地区も盛況で人も多いようです。

二、「巳の日」祭

これは、下平の厳島弁財天社の例祭で、元来は五月の「第一巳の日」に行われていたのを、現在では、つとめや子ども達の学校の都合などで、五月三日に変更して開催されています。

言うまでもなく、ここ弁財天社の守り神は「へび」ですから、今までもずっと神の使いや大地の主として、区民や子ども達に崇められてきたのです。当日は、午前中に境内の清掃を子ども会で行い、午後は二時ごろから神事が始まり、五穀豊穰、地区の安泰、家庭円満、子ども達の健やかな成長などを祈願します。神事が終ると、宮司から「弁財天や巳の日」について「簡潔」に話をしてもらい、子ども達も興味深く拝聴する習しです。

その後は、区民の楽しい「集いの日」となり、子どもが主役の球技や相撲大会で大いに賑い、区民総参加のゲートボールで最後をしめくくるようになっていきます。

一方、区長宅では、組長総動員で早朝から紅白の餅搗きが行われます。材料の糯米は区民の寄付によるもので、その量は実に一斗五升程度にもなると言われています。搗きあがった紅白餅は、会場に運ばれ、おはらいの後各戸にもれなく配られます。また、その一部は、競技の終わった子ども



「巳の日」祭に子供達も一役



初詣での人達へぜんざいの振舞い

ちにも配られ、嬉しそうな顔がそこ、ここに見られとても満足そうです。

最後の一汁携帯による大人の宴会は、区民の親睦と融和に大きく役立っているようです。

―追記―

大百科事典によると、「巳の日」は、三月から五月にかけての特別な日として祭るものとされています。

「巳の日」は、福神である弁財天の縁日とされており、そのために参詣するのだとも考えられます。

また、弁財天は、背振山や九千部山のような比較的高い山のいただきに奉祀されることが多く、水や降雨をつかさどる神で、蛇はその使いであるものとも言われています。その他、杵島郡の大町町聖岳の弁財天祭では、石祠周辺の土を持ち帰って田にふれば、その年は豊作になるという言い伝えもあって興味深いです。

特に、下平地区は、ほとんどの水田がため池の水を利用しているので、このような考え方が、かなり現存しているのではないかと思われれます。

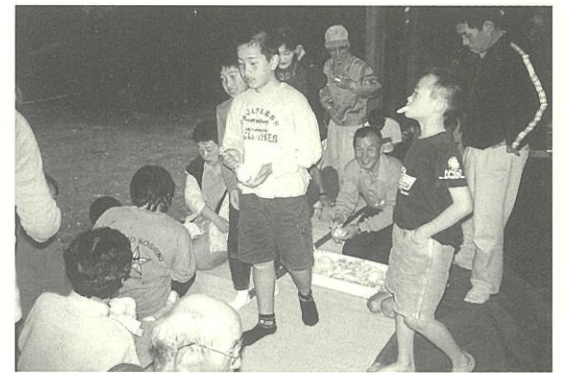
三、夏祭(ぎおん)

各地区の氏神様や観音様には、夏の例祭(ぎおん)があつて、神仏のお加護に感謝の意を表しています。それぞれの家庭では、親類や友人を招待して、酒肴のもてなしをしますが、中でも「ぎおんだご」は、風味豊かで、誰からも重宝がられている一品です。

神社には幟旗が建てられ、関係者が相集つて、厳粛な神事がと行われます。同時に、夜の演芸会やだしものの舞台準備も進められて祭気分一色となります。

夜になると、灯籠や境内一面に張りめぐされた提灯にあかりがともり、余興をはじめ多彩な催しで大にぎわいを呈します。昔は、浪花節や旅役者等の出しものが多く見られましたが、このごろでは、地区民のおどりやカラオケ等が舞台を飾るようになりました。

この例祭が、何時ごろ始められたかは定かではありませんが、青年団の活動華やかし頃は、団の一大イベントとして盛大に運営されていたものです。また、経費はすべて当日の「御花」で賄われ、演劇の合間を利用して、声高らかにその披露が行われ、これは今も続けられています。



搗きたての餅をほおぼる子供達



ぎおんのだしもの